文化・反戦 信州にも刻む

高畑勲さん 県内から惜しむ声

5日死去した高畑勲さんは講演などで県内をたびたび訪れ、映画への思い、平和の大切さなどを語ってきた。ゆかりのある人たちが死去を悼んだ。

【1面参照】

安曇野ちひろ美術館で、絵本を手にいわさきちひろの魅力について話す高畑勲監督＝昨年4月16日

高畑さんは、信州ゆかりの絵本画家いわさきちひろ（1918～74年）の絵を収蔵する安曇野ちひろ美術館（北安曇郡松川村）を運営する財団法人の役員。ちひろの長男で、約20年来の親交がある同館常任顧問、松本猛さん（66）＝安曇野市＝は「日本の文化について深く考えていた偉大な知識人が亡くなってしまった」と惜しんだ。

昨春の企画展は高畑さんが演出。ちひろが戦争体験を踏まえて描いた「焼け跡の姉弟」を原画の7倍以上に拡大し、壁と床を黒で統一した小部屋に展示した。高畑さんは「絵を楽しむ喜びは、絵の中に入り込むこと。ちひろの絵の中に見る人を入り込ませたい」と話していたという。

2015年12月、安全保障関連法の問題点を考えるため松本市で開かれた講演で、高畑さんは、日本人の国民性は歴史的に同調主義だ―とし、危機感を訴えた。その後のトークセッションに参加した信州大名誉教授の又坂常人さん（69）は「理念として反戦を訴えるだけでなく、地に足の付いた運動が必要とおっしゃっていた。まだまだ活躍してほしかった」と残念がった。

高畑さんは、プロデューサーを務めた宮崎駿監督の「風の谷のナウシカ」（1984年）で、中野市出身の作曲家・久石譲さん＝長野市芸術館芸術監督＝を音楽担当に抜てき。久石さんは以後、高畑さん、宮崎さんがメガホンを取ったスタジオジブリ作品で音楽を手掛け、「かぐや姫の物語」（2013年）でも担当した。久石さんは「誠に残念です。かぐや姫の物語が遺作になるとは思っていませんでした。もっと作っていただきたかった」とコメント。高畑さんが久石さんのコンサートに足を運んだことや、クラシックや現代音楽への造詣が深かったことを振り返り、「心からご冥福をお祈り申し上げます」と結んだ。

長野市の老舗映画館「長野相生座・ロキシー」では昨年7月、久石さんと高畑さんがトークショーをした。高畑さんの作品の数々を上映し、幅広い層の人が見に訪れた。支配人の田上真里さん（46）は「改めて偉大さを感じた。寂しいですね」としのんだ。

1990年11月、アニメ映画「おもひでぽろぽろ」についてインタビューに答える高畑勲さん。左は宮崎駿さん

高畑勲監督の主な作品（数字は製作年）

映画	1968年	「太陽の王子　ホルスの大冒険」
	72年	「パンダコパンダ」
	88年	「火垂るの墓」
	91年	「おもひでぽろぽろ」
	94年	「平成狸合戦ぽんぽこ」
	99年	「ホーホケキョ　となりの山田くん」
	2013年	「かぐや姫の物語」
テレビアニメ	1974年	「アルプスの少女ハイジ」
	76年	「母をたずねて三千里」
	79年	「赤毛のアン」
	81年	「じゃりン子チエ」

アニメ通し 社会や生き方問う

評伝

一貫してアニメーション表現の限界に挑み、日本のアニメを進化させてきた高畑勲監督が5日、死去した。作品は私たちが生きる社会を反映し、現実に光を当てる演出家だった。

大学生の時にフランスのポール・グリモー監督の映画「やぶにらみの暴君（当時、『王と鳥』に改作）」に衝撃を受け、アニメの道に進んだ。寓話（ぐうわ）性に富んだ表現に「アニメーションが思想や社会を語ることができる可能性を感じた」という。

盟友宮崎駿監督が空を駆けるファンタジーを目指したのに対し、高畑監督は地に足がついた演出に秀でていた。何げなくも考え抜かれたショットを積み重ねていく構成力。現実に裏打ちされた作品は、徹底した取材と物事の本質を見極める観察眼のなせる技だった。

テレビアニメ「アルプスの少女ハイジ」（1974年）は、日常描写を重ねる高畑演出の原点だ。「現地の人が見ても違和感がないものを」という思いから、当時は異例の海外ロケハンを敢行。アルプスの自然の中で、伸びやかに生きるハイジに視聴者は魅了された。その時代、日本は高度経済成長の果てに自然やゆとりを失いつつあった。

代表作「火垂（ほた）るの墓」（88年）は言わずと知れた戦争映画だが「反戦映画を作ろうと思ったわけではない」という。戦争の悲惨さを語りながら、耐え難い人間関係から逃れた子どもたちのたどる結末を描き、人とのつながりが希薄になった現代社会に生きる人々に問い掛けた。

「写実的な路線が極まったのは、紅花の生産風景などを緻密に描写した「おもひでぽろぽろ」（91年）だろう。実写よりも実感を伴う表現を追求し、セル画によるアニメがなしえる到達点にたどり着いた後、新しい境地に挑む。「ホーホケキョ　となりの山田くん」（99年）を経て、14年ぶりの監督作となった「かぐや姫の物語」だ。

「見た人の想像力を呼び起こす表現を」と、妥協しない粘り腰で到達したのは、ラフスケッチ風の手描きアニメ。3DCGアニメが主流の時代に極めて異色で画期的だった。2013年の完成後「日本のアニメーションを一歩進めたような気がする。仲間のおかげです」と顔をほころばせた。

自然をめで、野山を駆けるかぐや姫はハイジと重なった。インタビューに「人にとって幸せとはなにか」「この世に生まれたのだから、しっかり生きろ、ということですよね。自分も含めて」と語っていた。

常日頃、積極的に「反戦・護憲」を訴えていた。生涯を通じて「いかに生きるか」と、私たちに問い続けた。

（元共同通信記者　須永智美）

ジブリで盛大に見送る

スタジオジブリのプロデューサー鈴木敏夫さんの話

やりたいことがいっぱいある人だったので、さぞかし無念だと思います。宮崎駿（監督）とも相談し、ジブリとして盛大なお別れの会をとり行い、見送ることにしました。